

女子が性表現の消費者になることの意味
—「第7回青少年の性行動全国調査」データから—

守 如 子

Characteristic Traits of Young Female Consumers
of Pornography in Japan

Naoko MORI

Abstract

There are two significant genres of pornographic manga for young female readers in contemporary Japan. One is called “Teens’ Love” (or “Ladies’ Comics”), and the other is called “Boys’ Love”. The purpose of this study is to clarify the characteristic traits of female consumers of pornographic manga, focusing on the Seventh National Survey of Sexuality among Young People (2011). These surveys are conducted every six years by the Japanese Association for Sex Education (JASE).

The study compares the girls aged 12 to 22 whose source of information about sex was manga with those who cited other sources. The former had a positive image of sex and sexual open-mindedness, and demonstrated more knowledge of sex. Extrapolating from this data, I argue that pornography for young female readers can have a positive effect.

Keyword: pornography, manga, BL, Yaoi, media literacy, sex education

抄 録

日本には女性向けのポルノコミックがジャンルとして成立している。一つは、「レディコミ」あるいは「TL (ティーンズラブ)」で、もう一つは「BL (ボーイズラブ)」である。そのほかにもさまざまな少女・女性向けコミックのうちに性的表現が広く広がっている。本稿は、少女・女性向けマンガのうちに広がる性的表現の女性読者に着目し、その実態にせまる。具体的には、「第7回青少年の性全国調査」のデータに基づき、性の情報源がマンガである女子とそうではない女子を比較する。性の情報源がマンガの女子は、セックスに対するポジティブなイメージと、性に対する寛容性をもつと同時に、性知識も高かった。このようなデータを通じて、ポルノグラフィが女性の読者にもつ有用性を明らかにする。

キーワード：ポルノグラフィ、マンガ、性情報源、BL、やおい、メディア・リテラシー、性教育

1. はじめに

若者がポルノグラフィックな表現を消費していることに否定的な意見を持つ人は多い。たとえば、2008年には、堺市の市立図書館が「市民」を名乗るバックラッシュ派の人物か

らの執拗な抗議をうけて約5500冊ものボーイズラブ小説を撤去するという事件がおきた。ボーイズラブ (BL) とは、男性同士の愛を小説やマンガなどによって表現する女性向けの作品群である。その作品の一部に、性的な表現を含むこともある。BL小説の撤去を要求した「市民」は、BL小説を楽しむ女性たちを「真っ当ではない」と表現した。堀あきこ (2015) は、BL図書排除事件からは、女でありながら性的なものを好む者への嫌悪と、同性愛への嫌悪 (ホモフォビア) の二重の差別がみえると批判している。

ポルノが若者に与える悪影響を懸念するのは、バックラッシュ派や保守派だけではなく、リベラル側にもみられる態度である。例えば、『性の貧困と希望としての性教育』では、さまざまな論者が「性における貧困」を促進する要因の一つとして、「マスコミの発信するポルノ情報 (…「性≒暴力」というメディア情報、「性のプレイ化」) (浅井編2009: 235-236) を指摘しており、具体的には、男子に対してはアダルトビデオが、女子に対しては女性向けのコミックが批判的に分析・検討された。若年男性だけでなく (あるいは、若年男性とは異なる意味で)、若年女性もまた性表現の消費者になっていることが問題視されてきたのである。

このような批判の背景として、日本では女性向けのさまざまな性表現が (とりわけ90年代以降には女性向けのポルノグラフィも) 流通していることを見のがすことはできない。女性向けのポルノグラフィックなジャンルには、女性向けの官能小説や、ポルノコミック、BLのドラマCD、18禁ゲーム、女性向けアダルトビデオ (AV)、女性向けの性表現を集めたアダルトサイトなどがある¹⁾。これらの女性向けの性表現のうち、最も深く根付いているジャンルが、ポルノコミックである (守 2010)。女性向けのポルノコミックは、大きく分けると二つのジャンルに分類することができる。一つは、女性を主人公にして、男性 (時

1) 女性向けの性の商品が発展し続けている一方で、本当にそれらを消費しているのは女性なのか、疑念が呈され続けてきた。たとえば、反ポルノグラフィ理論と運動の牽引者キャサリン・マッキノン は、日本での講演会で、女性にとってもポルノグラフィは有用ではないのかと語った発言者に対して、「ポルノグラフィがレディースコミックなどの形をとって、女性の中にも普及しているという日本での状況は「マスコミが、男性向けにポルノグラフィをより刺激的にするために流した偽の情報である」と断定した」という (村瀬1996:102)。近年でも、『AV女優の社会学』の著者、鈴木涼美が、女性向けAVの主要な消費者は男性であると述べた。のちに鈴木は、少し意見を変えている。「私の想像の一側面はやや裏切られ、女性向けAVは確かに存在し、女性向けAVを鑑賞する女の存在もまた、現実のものであって男の妄想上のもではなかった。(中略) 女性向けAVは、肉体を男に触れられない女性たちのもっとヒリヒリとした欲求にこたえている」と述べている (鈴木涼美「女性向けAVという幻想」<https://gqjapan.jp/culture/love-sex/20160127/porn-for-women>)。鈴木は〈男に求められてこそ女〉という頑なな信念はまったく驚くほかないが、鈴木に限らず、マスターベーションをする女性に対する偏見は根深いものと言わざるをえない。彼女たちはなぜ女性が性の商品を消費していることを否認したいのだろうか。女性は性の商品を必要としない存在であると決めつけるのではなく、私たちに必要なのは、女性が性的な商品の消費者になることの意味を真正面から見据えることにあるのではないだろうか。

には女性）との性愛を描く「レディコミ（レディースコミックの略）」や「TL（ティーンズラブの略）」と呼ばれるジャンルである。もう一つは、男性同士の性愛を描く「BL」の一部である。両ジャンルは、主に雑誌というメディアによって流通してきた。それらの雑誌は、女性読者の性的なファンタジーを主題とするマンガ作品をそれぞれ10作品程度掲載しており、ソフトなものからハードコアまで、雑誌によってその度合いはさまざまである。ポルノグラフィックなレディコミ誌は90年代初頭に、ポルノグラフィックなBL誌は90年代中頃に出版されるようになった。現在では、レディコミよりも若い世代に向けたものに絵を変更したTL誌がレディコミ誌に代わって主流化していている。また、レディコミ・TL・BL以外にも、性的な内容を含む作品が女性向けマンガ雑誌のうちに広い範囲で掲載されてきた。このように女性向けのマンガのうちに広がる性的な表現が、若年女子にとってどのような意味を持つかが問われているのである。

他方、海外のポルノグラフィ研究に目をむけると、男性消費者のみを主題とするものが圧倒的で、女性の消費者に焦点を当てた研究は非常に少ない。研究内容も、消費者への「悪影響」に注目するものが大半を占める。具体的には、ポルノグラフィ消費が性行動の早期化や、ジェンダー規範・レイプ神話の強化に関わっているのではないかという視点に基づく研究や、ポルノ利用とネットアダクションとの関係の考察などがその典型である。

女性の消費者にも目配りをした数少ない研究の一つとして、デンマークの18～30歳の異性愛男女について、ポルノグラフィ消費のジェンダー差について分析したHald（2006）を指摘することができる。男性は一人で、女性はパートナーと見る頻度が高いという分析や、女性はソフトコアポルノを好むという分析をみると、女性向けのポルノグラフィというジャンルが存在している日本とは状況が大きく異なっていることが見て取れる。守（2010）で論じたように、日本では、マンガというメディアが、女性向けのハードコアなポルノグラフィの成立を可能にしている。登場人物が実在の人間ではなく、マンガという絵であることによって、消費者はハードコアな作品であっても比較的恐怖感をもたずに読むことができるためである。また、男性を主なターゲットとして成立しているアダルトビデオなどの性的なメディアは、インターネットの普及前は、女性が自らアクセスすることが難しく、パートナーの男性を経由して接触する場合が多かった。女性向けのポルノコミック誌は男性と経験をもたない女性であっても容易に手に入れられたことも、日本の女性が置かれた状況の大きな特徴といえるだろう。

近年の研究としては、スウェーデンの16歳の男女のポルノグラフィ消費のジェンダー差に注目したMattebo 他（2014）がある。96%の男子と54%の女子にポルノグラフィの視聴

経験があり、ポルノグラフィ消費者はポルノグラフィについて肯定的な認知をもっていたこと、ポルノグラフィ消費をしている男女の間にファンタジーの側面や性行動などに違いはみられなかったことが指摘されている。2010年代からのスマートフォンの普及が、海外においても女性や若者のポルノグラフィ消費を後押ししているのではないだろうか。家族用のパソコンではなく、個人化されたメディアであるスマートフォンを持つようになったからこそ、性的な内容のコンテンツにアクセスすることが容易になった女性や若者は少なくないことが想像される。

日本では、男女に分かれたマンガ雑誌という流通形態が、スマートフォンの普及以前においても、女性たちが性的な表現にアクセスすることを可能にしていた。日本の女性が置かれてきた状況は、他国よりも先駆的なものであったとみることもできそうである。

本稿では、女性向けの性表現が広く流通しているこの社会において、それらを読んでいる女子にはどのような特徴があるのかを分析したい。『性の貧困と希望としての性教育』などで懸念されているように、性表現はその受け手である女子に悪影響を与えているのだろうか。具体的には、2011年に行われた「第7回青少年の性行動全国調査（JASE）」のデータに基づき性表現が女子に与える影響を考察していく。この調査は、1974年からほぼ6年間隔で行われているもので、全国の中学・高校・大学生の、性経験や、性をめぐる規範意識、性知識やその情報源などを明らかにすることを目的としている。現在、筆者自身もこの調査のメンバーに加わっている。調査データを通じて、女子にとって性表現を消費することの意味は何か、その一端を明らかにしていく。

2. 少女・女性向けマンガの「問題」

少女・女性向けマンガの性的表現は、何が問題視されてきたのだろうか。その「問題」を見る前に、少女・女性向けマンガ雑誌全体における性的表現の状況を確認しておきたい。私はかつて一か月の間に発行された少女・女性を主たるターゲットにしたマンガ雑誌を自宅周辺の書店で買い集めたことがある。具体的には、2008年8月号²⁾として発行された隔週刊誌、月刊誌、隔月刊誌（8月号がない場合は7月号）として発行された雑誌である。

この時点において、少女・女性を主たるターゲットとするマンガ雑誌は、大まかに言っ

2) ただし、この時点は次節で分析する2011年に調査があった「第7回青少年の性全国調査」よりも3年前であることに注意されたい。

で以下のように分類することができる。①『ちゃお』『なかよし』『りぼん』などの小中学生をメインターゲットにした少女マンガ誌、②『別冊マーガレット』『別冊フレンド』『ベッコミ』『花とゆめ』などの中高校生をメインターゲットにした少女マンガ誌、③『ウィングス』『ゼロサム』『ビーズログ』などのファンタジーやアニメ・同人文化が好きな女子をターゲットにした少女マンガ誌、④『フィールヤング』『デザート』『プチプリンセス』などの大人女子マンガ誌、⑤『YOU』『Be LOVE』『jour 素敵なお主婦たち』などの女性コミック誌、⑥『本当にあったご近所スキャンダル』『ほんとうにこわい嫁・姑』『結婚ミステリー』などのミステリー・スキャンダル系レディコミ誌、⑦『コミック Amour』『レディースコミックタブー』などのポルノグラフィックなレディコミ誌、⑧『恋愛パラダイス』『絶対恋愛 Sweet』などの TL 誌、⑨『ビーボーイ』『麗人』などの BL 誌である³⁾。この号（2008年8月号）の雑誌内容を確認すると、⑦レディコミ誌と⑧ TL 誌はポルノグラフィックな雑誌であり、⑥スキャンダル系レディコミ誌の中にはポルノグラフィックな作品を掲載している雑誌があった。この3ジャンルほどセックスシーンをあからさまには描写しないが、登場人物が性的な関係を持っている／持ちうるものが物語の前提とされる作品が多いのが、④大人女子マンガである。⑨ BL 誌についていえば、ポルノグラフィックなものからセックスシーンを描写しないものまで、そのカラーは雑誌によってさまざまだった（⑦レディコミ誌や⑧ TL 誌と同様のポルノグラフィックなものから、④大人女子マンガ程度のもので多様な雑誌がみられた）。そのほかの少女・女性マンガ誌は性的な表現に対してそれぞれ独自の線引きを行っているようだ。例えば、②中高生向け少女マンガ誌は、キスは描くがセックスは描かないし、①小中学生向け少女マンガ誌と③ファンタジー系少女マンガ誌、⑤女性コミック誌ではセックスだけでなくキス描写もほぼみられなかった。

女性向けマンガ雑誌のうち⑦レディコミ誌と⑧ TL 誌、そして⑨ BL 誌の一部は、各自治体の条例で有害図書指定されたことがあるものもある⁴⁾。ここで、書店での販売のされ方という点から若者とポルノグラフィックな雑誌との関係をみておきたい。男性向けのポルノ

3) これら以外に、⑩『コミック百合姫』などの百合雑誌をジャンルとして付け加えることもできるかもしれない。ただし、百合雑誌は読者を男女どちらにも限っていないこと、そして、雑誌の種類が大変少ないことから、本文からは割愛した。

4) マンガの有害図書指定については、長岡（2010）を参照のこと。長岡によると、2007年5月に②の一つである『少女コミック』の性表現が激しすぎるとして社会問題化され、茨城県などでは一部の作品が有害図書指定される事態にまで発展した。ただしこの数年前から出版社どうして自主規制が進めていたところであったという（長岡2010：233-235）。私が購入した2008年8月号はこのような動きの直後であったため、特に②のジャンルにおいては性的表現が見られなかったのかもしれない。また、女性向けの作品が有害図書指定されることの問題については堀（2015）の議論が興味深い。

誌やポルノコミック誌は、18歳未満の青少年が買ったり立ち読みしたりすることがないように、パッキングしたうえで、書店やコンビニなどの成人向けコーナーに区分陳列されて販売されている（ゾーニング）。他方、女性向けのポルノグラフィックな雑誌は、このような成人向けコーナーに陳列されているのを見かけない。成人向けコーナーは〈男性の空間〉であり、その空間で売られる商品は多くの女性にとって手を伸ばすことが難しいからである。女性向けのポルノグラフィックなマンガ雑誌は、こういった出版物を扱っている書店——典型的には大型スーパーマーケットの片隅にある書店や郊外型書店——で、他の少女・女性向けマンガ雑誌と同じ場所に並べられているのが一般的な売り方といえるだろう。また、このような書店の多くでは、内容が性的かどうかにかかわらず、女性向けマンガ雑誌すべてをパッキングして売っている場合も多い。マンガ雑誌がパッキングされるのには、ポルノグラフィックな雑誌であるという理由だけでなく、付録をとじ込むためや、立ち読みの防止など、いくつかの理由があるためである。男性向けのポルノ誌とは異なり、女性向けは売り場で明確に区分・区別されていないことが多いといえそうだ。

これらの少女・女性向けマンガの性表現がもつ「問題」をいち早く分析したのがNPO法人SEANによる報告書『マンガ・雑誌の『性』情報と子どもたち』（遠矢家永子・他編2008）である。報告書では、中学生がよくよむ雑誌である少年マンガ誌と、前述した区分で②中高校生向け少女マンガ誌の「性」の描き方を批判的に分析・検討している。少女マンガでは、所有関係や束縛を肯定する恋愛観や、男子がリードし女子が従うという恋愛関係、デートDVやデートレイプといえる性関係が見られ、少年マンガでは「女性性」を商品化した描写が脈絡なく挿入されていることを指摘している。そして、これらの情報を無批判に「恋人とのつき合い方」の参考にしてしまうと、デートDVのような関係性に陥りやすくなるのではないかという懸念が示され、マンガ誌の性情報を批判的に読み解く力をつける教育の必要性が主張されていた（遠矢・他 2008：29）。

また、『性の貧困と希望としての性教育』では、⑧ TL 誌⁵⁾ が批判的に検討されている。『無敵恋愛S-girl』『上級恋愛ミント』『恋愛Love MAX』といったTL誌を分析した田代美江子（2009）は、作品内容の特徴を次のようにまとめている。第一に、「主人公が異性と両想いになったら即日性行為に及んでいる」という点である。TLは、セックスを「恋愛のハッピーなゴール」として位置づけていると田代は述べる。第二が、「[知人間レイプ]が

5) 田代（2009）は、このジャンルを「レディ・コミ」と呼んでいるが、本論文ではより一般的な呼び方である「TL」という言葉を使っている。

公然と、しかも、これもまた「ハッピーエンド」で描かれている」という点である。知人間レイプとは、「互いを知っているもの同士の間における、強要された、望まれないセックス」を指す。TLの作品においては、女性主人公はセックスを強要され拒みはするが、結局はセックスに及び、しかも、セックスの後に両思いになるというハッピーエンドで終わるストーリーがほとんどだという。これを田代は、「嫌がっていても本当は嫌ではない」といった、性暴力をする側の論理で描かれたものだと批判している。第三の特徴が、セックスシーンが必ずあるにもかかわらず、避妊や性感染症予防に関する描写がほとんど見られないという点である。田代は、これは「無いものねだり」ではあるだろうが、セックスに避妊や性感染症予防が必要であるという知識が欠落してしまってよいのかと、作品に警鐘を鳴らしている。以上をみると、TLのストーリーは「恋愛至上主義」で、表面的には「恋愛＝幸福」「性行為＝快楽」といった図式で、あたかも恋愛や性のプラス面が描かれているように見える。しかし、(1) 男性優位の強制的な性行為や受身で自己決定が全くできていない女性が登場し、さらに「知人間レイプ」などの暴力的な性行為、犯罪的な性行為が当たり前のことのように描かれていること、(2) 避妊や性感染症予防に関する情報が極端に少ないなど、セックスに伴うリスクについての知識をそこから得ることはできないことから、田代はTLをジェンダー・バイアスに縛られた性差別的で暴力的な性情報源であると位置づけている。また、田代は、これらのTL誌は、「第54回学校読書調査報告」を見ると、必ずしも多くの中・高校生が手にしているわけではないが、ここで展開される〈恋愛〉ストーリーは、セックスシーンの分量を除けば、少女マンガと共通するものであるとも述べている。『性の貧困と希望としての性教育』では、このような分析を背景に、今日若者がさらされている情報のゆがみを理解し、自らの確かな情報を取捨選択する「メディア情報の読解能力」（メディア・リテラシー）養成の必要性が何度も確認されている。

ここで改めて問い返したいのが、これらのメディアは本当に若者の情報をゆがめているのかという点である。少女マンガやTL誌がSEANや田代が分析するような内容をもつとしても、それらは読者にそのまま単純に受け入れられているのだろうか。読者の性に対する意識や態度を分析してみる必要はないのか。

BLについても、さまざまな議論が展開されてきた。BL論の全体像にせまる論考には金田淳子（2007）をはじめとしてさまざまなものがある。ここでは、BLに向けられた「同性愛差別」という批判を紹介したい。90年代前半の「やおい論争」を始めとして、「やおい（BLのかつての呼び名）」が同性愛差別ではないかという議論は何度も展開されてきた（同性愛差別批判の全体像については堀2010を参照）。特に注目したいのが、溝口彰子（2000）

による批判である。溝口（2015）はBLが作品中に同性愛を否定するような表現（ホモフォビア表現）を含んでいることを作品に即して批判的に分析している。その後、溝口は近年の人気作品を分析し、BLがホモフォビアや異性愛規範、そしてミソジニーを克服するための手がかりを与えるようなものに「進化」しつつあることを論じた。溝口は「世間のホモフォビアを内面化する前にこれ（著者注：進化形BL）を読んだ若きBL愛好家たちが、現実にはどのような行動をとっていくのか、楽しみだ」（溝口2015：204）と述べているが、実際のところ、BL読者は同性愛に対してどのような意識をもっているのだろうか。

本稿では、このように議論されてきた少女マンガやTL、BL作品の内容が、消費者に影響を与えているのかどうかを考察していく。

3. 「第7回青少年の性行動全国調査」から見る性的マンガを読む女子の特徴

調査の概要

本節では、「第7回青少年の性行動全国調査」のデータに基づいて、性的表現をもつマンガの女性読者の特徴を描いていく。この調査は、都市規模ごとに調査地点として選定した11地点（大都市4地点、中都市4地点、町村3地点）の学校から、同意の得られた学級を調査対象として選定したうえで、2011年10月から2012年2月にかけて自記式集合調査の形で実施された。その結果、中学生2504名、高校生2578名、大学生2600名、合計7682名から調査票を回収することができた。このなかから全国の生徒・学生数の分布を考慮しながら、2011年度の文部科学省『学校基本調査』などをもとに調査地点・学年・性別で層化し、一定数を割り当てる形で事後ウエイトをかけ、最終的に合計7640人を分析対象としている（調査の詳細については、日本性教育協会編2013を参照）。なお、以下は、断りのない場合を除くと、中学・高校・大学女子全体の分析結果である。

分析の視点：「性交（セックス）」の情報源としてのマンガ

この調査には、女性向けの性表現や女性向けのポルノコミックの読書経験に関して直接尋ねる項目は存在していない。代わりに、マンガを選択肢に含む、「性交（セックス）」に関する情報源」に関する項目に注目してみたい。

図1は、「性交（セックス）」について、「どこから知識や情報を得ていますか」と尋ねた回答を男女別にまとめたものである（複数回答）。まず、男女ともに、「友人や先輩」がもっとも割合が高い。女子についていえば、「友人や先輩」（59.2%）に次いで、「学校（先

女子が性表現の消費者になることの意味（守）

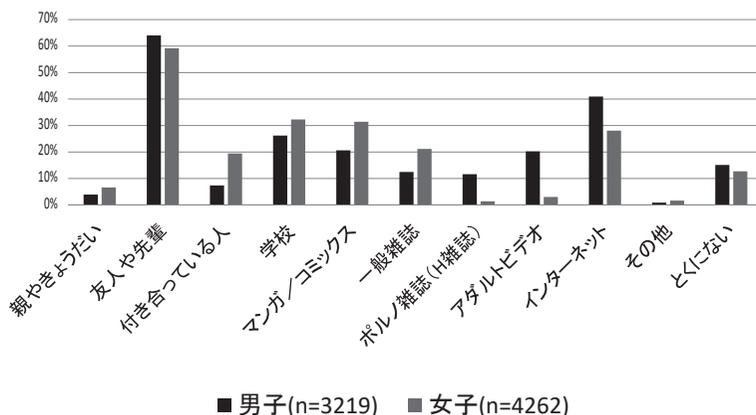


図1 「性交（セックス）」に関する情報源（複数回答）

生、授業や教科書」が32.3%、「マンガ／コミックス」が31.4%、そして「インターネット」が28.1%であった。これらの項目のうちでも、女子の特徴的な点の一つが「マンガ／コミックス」を情報源とする人の多さである（男子は20.6%。p<0.001, V=0.121）。

もちろん、この「マンガ／コミックス」とは、少女マンガやTLやBLなどに限られてはいない⁶⁾。ただし、性的な表現を含んだマンガの読者であることを明確に示している項目で

6) 実際に、若者女性はどうのようなマンガを手に行っているのだろうか。この点については、若者とさまざまなマンガジャンルとの関りを実証的に調査した白石智子（2015）の研究が手がかりになる。白石は関東地方のある国立大学に通う大学生に、マンガ雑誌名を提示し、それぞれのマンガジャンルの読書経験を分析している。白石の研究から女子の読書経験のみを抜き出してまとめたのが表1である。

表1 女子大学生の各マンガジャンルの読書経験（n=228）（白石（2015）より作成）

	男性向け					女性向け				
	少年マンガ	青年マンガ	壮年向けマンガ	成人マンガ	百合マンガ	少女マンガ	大人女子マンガ	TL	BL	レディコミ
今は読んでいないが、過去に読んでいた	37 (16.2%)	9 (4.0%)	4 (1.8%)	1 (0.4%)	1 (0.4%)	124 (54.4%)	11 (4.8%)	3 (1.3%)	7 (3.1%)	0 (0.0%)
今も読んでいる	135 (59.2%)	64 (28.2%)	44 (19.3%)	7 (1.7%)	19 (8.3%)	89 (39.0%)	31 (13.6%)	11 (4.8%)	35 (15.4%)	4 (1.8%)

このような分析を見ると、女子大学生の読んでいる雑誌は、少女・女性向けマンガよりも少年・男性向けマンガの割合が高い可能性もある。ただし、白石の調査はいくつかの点で問題があるように思われる。第一に、調査対象の限定性である。調査大学による限定性だけではなく、全体の人数の10分の1の回収数ではあるが、マンガサークルでも調査票を配布するなど、データに偏りがある可能性がある（マンガサークルのメンバーはマンガ読書量が多いだろうし、特定のジャンルへの偏りも予測される）。第二に、團（2017）が指摘するように、女性はマンガを雑誌ではなく、単行本で読むことが多く、雑誌名をあげられても、自分の読んだことのある作品がどの雑誌に掲載されているものなのか理解していない可能性が高いという点である。以上のような限定はあるものの、2節のマンガ雑誌の分類に即して述べると、①小中学生向け少女マンガ誌や②中高校生向け少女マンガ誌を読んだことがある人は多いこと、そして④大人女子マンガ誌と⑨BL誌を読んでいる人が一定数いること、少数ではあるが⑧TL誌読者も存在していることがわかる。

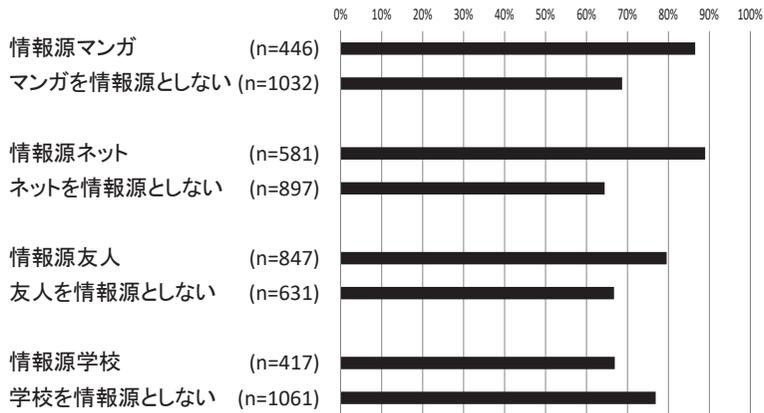


図2 セックスに関する情報源別「性的関心あり」の割合（大学女子）

あると読み解くことはできるだろう。本節では、マンガを性の情報源としている女子と、マンガを情報源としていない女子（「マンガ／コミックス」項目に○をつけていない女子）を比較することで、性表現と女性消費者との関係を読み解いていきたい。

（1）性的関心

マンガを情報源としている人と、そうでない人との間にみられる顕著な差異として、性的関心の有無を指摘することができる。「あなたは、いままでに、性的なことに関心を持ったことがありますか」という質問に対して「ある」と答えたのは、マンガを性の情報源としている女子では67.4%であったのに対し、マンガを情報源としていない女子（この項目に○をつけていない女子）では46.1%であった（ $p < 0.001$, $V = 0.199$ ）。

ただし、性的関心の高さは、性の情報源の「あり／なし」そのものと関連しているわけではない。図2は、大学生女子に関して、情報源別に性的関心が「ある」と答えた人の割合を示している。マンガと同様に、インターネットや友人については、それらを情報源としていると答えた女子は、そうではない女子に比べて、「性的関心がある」と答えた人の割合が高い。他方、学校を情報源としている女子はそうではない女子に比べて「性的関心がある」と答えた人の割合が低い（ $p < 0.001$, $V = 0.103$ ）⁷⁾。このようにみると、学校教育の

7) 大学女子においてこの設問で性的関心が反転してしまうという現象は、性の情報源が学校であると答える人が、他の情報源に接していない可能性が高いことを示しているように思われる。つまり、ここで「学校」項目に○をつけている人もつけていない人も、学校では同じような教育をうけてはいるものの、性の情報源が他になかった人は「学校」と答えており、他にももっと大きな影響を受けた情報源がある人は「学校」と答えていないのでは

女子が性表現の消費者になることの意味（守）

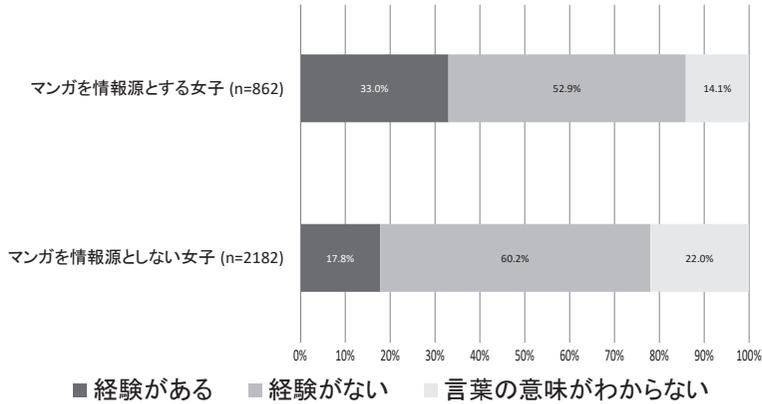


図3 マスターバージョンの経験率（女子全体）

ように、各自の性的関心とは無関係に情報が与えられるメディアと、各自が主体的にアクセスするメディアが存在していることがわかる。マンガやインターネットは、本人が自らの性的関心に応じて、アクセスするメディアの典型であると言えるだろう。

また、マンガを情報源としている女子は、マンガを情報源としていない女子と比べて、友人と「性の問題」について話すと答えた人が多かった ($p < 0.001$, $V = 0.127$)。「性の問題」に関心をもち、友人ともその関心を共有していることがうかがえる。

性的関心と関わるものとして、マスターバージョン経験も見のがすことはできない。図3は、「自慰（マスターバージョン、オナニー）」を経験したことがあるかを尋ねた項目である。マンガを性の情報源としている女子の自慰の経験率は33.0%であるのに対し、マンガを性の情報源としていない女子は17.8%であった。また、マンガを情報源としていない女子の「言葉の意味がわからない」とする割合の高さも注目に値する ($p < 0.001$, $V = 0.170$)。

マンガを性の情報源としている女子は、性的関心が高く、友人と性についてよく話す人やマスターバージョンをしている人の割合も比較的高いという傾向がみられた。

(2) 性意識

マンガを性の情報源としている女子の一番の特徴として、セクシュアリティに対する寛

ないかということだ。なお、中学・高校女子についていうと、学校を情報源とする人としない人については性的関心の有無について有意な差は認められないものの、マンガ、インターネット、友人を情報源とする人としない人の間に、大学生と同様の傾向がみられた。

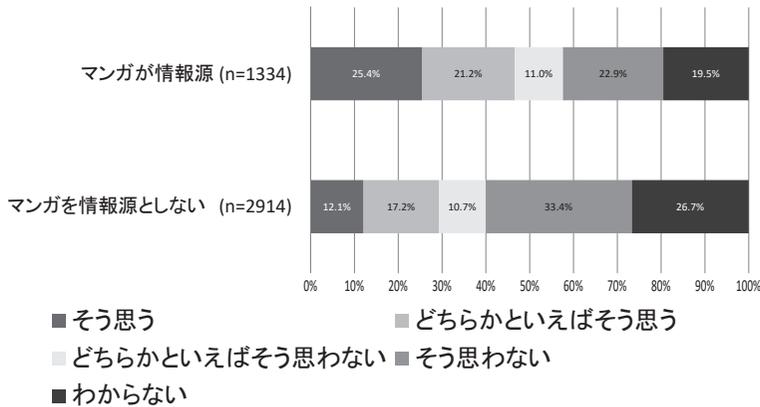


図4 「同性との性的行為はあってもかまわない」(女子全体)

容な意識を指摘することができる。もっとも特徴的な違いが、同性同士の性行為に関する意識の項目でみられた。図4は、「同性と性的行為をすることがあってもかまわない」に関する回答⁸⁾を示している。「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」をあわせると、マンガを性の情報源としている女子については46.6%であったのにたいし、そうではない女子は29.3%にすぎなかった ($p < 0.001$, $V = 0.194$)。女性向けのマンガには、男性同士の恋愛や性を描くBLというジャンルが含まれている⁹⁾。溝口(2015)が論じるように、BLが読者に多様なセクシュアリティに対する寛容な態度をもたらしているのかもしれない。

そのほか、「愛情がなくてもセックスすること」($p < 0.001$, $V = 0.124$)や「お金や物をもらったりあげたりしてセックスすること」($p < 0.001$, $V = 0.133$)といった項目においても、マンガを情報源としている女子のほうがそうではない女子に比べて寛容度が高いという傾向がみられた(図5)¹⁰⁾。

性に対する寛容な意識は、マスターベーションに対する意識においても見ることができる(図6)。マスターベーションを「あってよい行為だと思う」と答えた人はマンガを性の

8) この質問項目は、そのような関係一般についてどう思うのかを尋ねているのか、自分自身のことについてなのかを判別しづらく、「同性愛」やセクシュアル・マイノリティについて肯定的／否定的な態度をもっているかどうかを測定する項目と単純に見なすことは難しいと感じられるかもしれない。しかし、この項目は、「男性は外で働き、女性は家庭で守るべきだ」や「女性より男性の方が、性欲が強い」といった〈一般論〉を尋ねる項目と同じ大問に配置されているため、回答者には〈一般論〉を尋ねる項目としてうけとめられていると想定しても問題はないだろう。

9) 同性同士の性的行為に対する寛容な態度はマンガを情報源とする男子にもみることができる。マンガには同性同士の性的関係が描かれることが他のメディアに比べて多いことが関係しているのかもしれない(男性向けポルノコミックのこのような状況については、永山薫(2006:第7章)を参照のこと)。

10) 「セックス」に対する意識を問うこれら二つの項目については中学生には尋ねていない。

女子が性表現の消費者になることの意味（守）

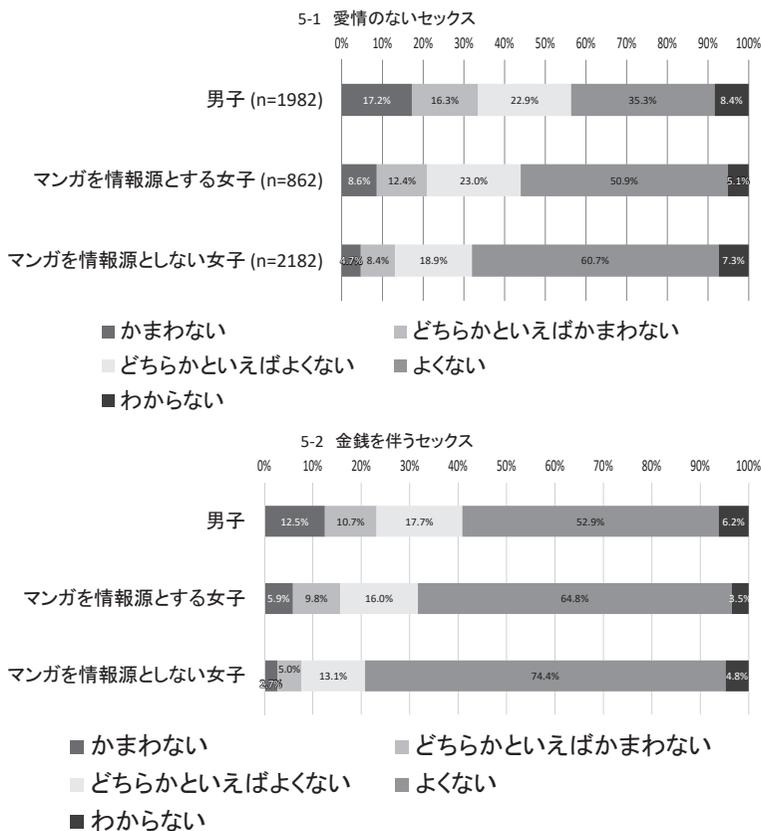


図5 セックスに対する意識（高校・大学生）

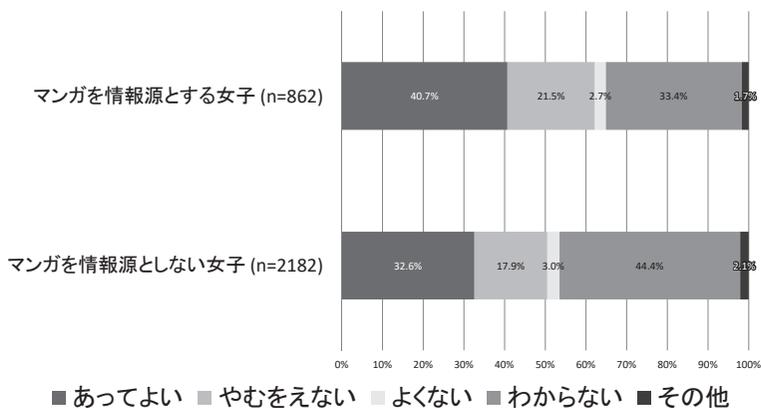


図6 自慰（マスターベーション）についての考え（女子全体）

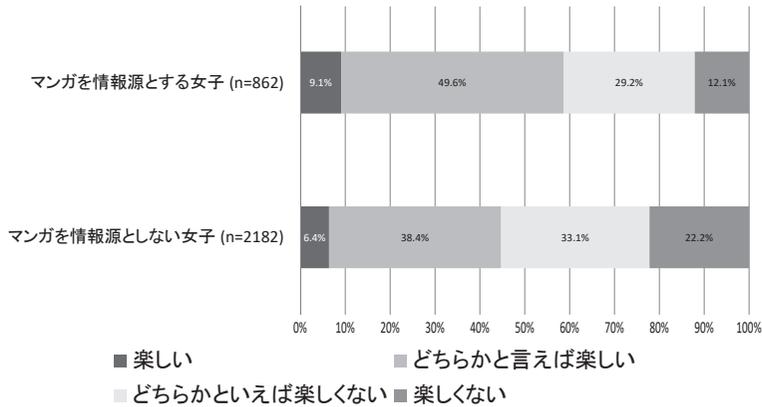


図7 「性・セックス」のイメージ（女子全体）

情報源としている女子は40.7%であるのに対し、そうではない女子は32.6%であった。他方、マスターベーションを「どう考えたらいいかかわからない」と答えた人はマンガを情報源としている女子では33.4%であるのに対し、そうではない女子は44.4%に達した ($p < 0.001$, $V = 0.112$)。

図7は「性」や「セックス」という言葉について、どのようなイメージをもっているかを尋ねた項目である。「性（セックス）」に対するイメージを「楽しい」と「どちらかといえば楽しい」と答えた回答者は、マンガを性の情報源としている女子では58.7%であったのに対し、マンガを情報源としない女子は44.8%であった ($p < 0.001$, $V = 0.146$)。マンガを性の情報源としている女子のほうが、「性（セックス）」に対してポジティブなイメージを持っていると言えるだろう。

学校段階によって異なる結果がみられたのが、男女のダブルスタンダードに関わる項目である¹¹⁾。図8は、「男性は女性をリードするべきだ」という意見について、学校段階別にまとめたグラフである。全体としてみると、学校段階があがるほど、「男性がリードするべき」という意見に賛同する女子の割合は下がる傾向にある。本稿の問題意識に即してみると、問題は、中学生と高校生においては、マンガを性の情報源とする女子のほうが、そうではない女子に比べてこの意見を肯定する割合が高いという点である（中学生女子 $p <$

11) ただし、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」「女性は働いていても、家事・育児のほうを大切にすべきだ」といった性別役割分業に関わる項目については、マンガを性の情報源とする女子とそうではない女子との間に有意な差は見られなかった。北田（2017）は、「二次創作を行う女子≒腐女子」のジェンダー平等志向について論じているが、「性的なマンガ読者の女子」という線引きでは、ジェンダー平等に関する際立った傾向はみられないようだ。

女子が性表現の消費者になることの意味（守）

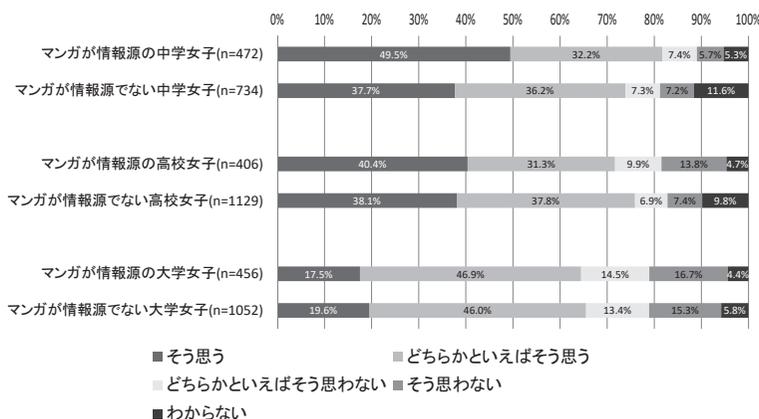


図8 「男性は女性をリードすべきだ」

0.001, $V = 0.142$, 高校生女子 $p < 0.001$, $V = 0.141$)。ただし、大学生については有意な差はみられなかった。

2節で紹介した少女・女性向けマンガで問題視されていたのは、まさにセクシュアリティに関する男女のダブルスタンダードであった。少女マンガやTL誌には、「男子がリードし女子が従うという恋愛関係」(遠矢 2008)や「男性優位の性関係」(田代 2009)が描かれていることが批判されていた。中学生や高校生は、マンガから影響を受けて、このような意識を強化しているのかもしれない。

(3) 性行動

性に対して寛容な意識をもっている一方で、マンガを情報源とする女子はセックスなどの経験率が必ずしも高いわけではないことは注目に値する。図9のように、高校と大学女子に関して、マンガを性の情報源としている女子は、そうではない女子に比べて、「キス」も「セックス(性交)」も経験率が低かった(キスの経験率は高校生で $p < 0.001$, $V = 0.092$ 、大学生で $p < 0.001$, $V = 0.098$ 。セックスの経験率は高校生で $p < 0.001$, $V = 0.090$ 、大学生で $p < 0.01$, $V = 0.086$)¹²⁾。ポルノグラフィは青少年の性行動を活発化・低年齢化させるとして、青少年にポルノグラフィを見せるべきではないと述べる人は多いが、調査結果を見る限り、女子についてはこの意見は必ずしも当てはまるものではないと言えるだろう。

12) 中学生については「セックス」の経験をたずねていないため(「セックス」という言葉を使わず、「性的接触」という言葉を使っている)、分析から削除している。

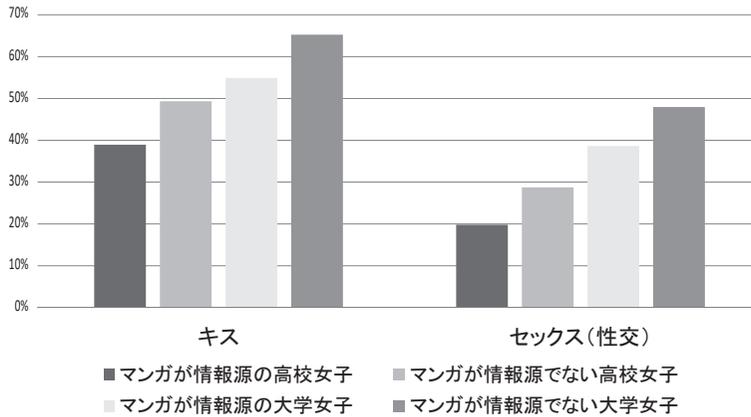


図9 性行動の経験率

SEANの報告書（遠矢 2008）においては、少年マンガや少女マンガがデートDVのような関係に陥りやすくさせているのではないかという懸念が示されていたが、データからはこのような問題はみえてこなかった。「付き合っている人」からDVをうけた経験¹³⁾があるかどうかについて、「付き合ったことがありマンガを情報源としている女子」と、「付き合ったことがありマンガを情報源としていない女子」を比べてみたところ、有意な差はみられなかった。

意識上では性に対する寛容性や男女のダブルスタンダードをもちながら、実際の行動においては、キスやセックスといった経験が早いわけでもないし、DV関係に陥っているわけでもなかった。

(4) 性知識

田代（2009）では、TLは避妊や感染症予防に関する描写がほとんど見られないことが批判されていた。マンガを情報源としている女子の、こういった主題に関する性知識は実際どのような状況にあるのだろうか。

図10は、高校生と大学生に関して、マンガを情報源としている女子と、そうではない女子それぞれの性知識の正答率を示している（中学生にはこの設問は尋ねていない）。性知識

13) 調査においては、DV項目として、「携帯電話のチェックなどで、友達つきあいに干渉された」、「馬鹿にする、傷つく言葉を使う、無視する（精神的暴力）をされた」「望まない性的行為を強要された」、「たたく、ける、物を投げるなど（身体的暴力）をされた」という4つの項目を尋ねている。なお、この項目は中学生については尋ねていない。

女子が性表現の消費者になることの意味（守）

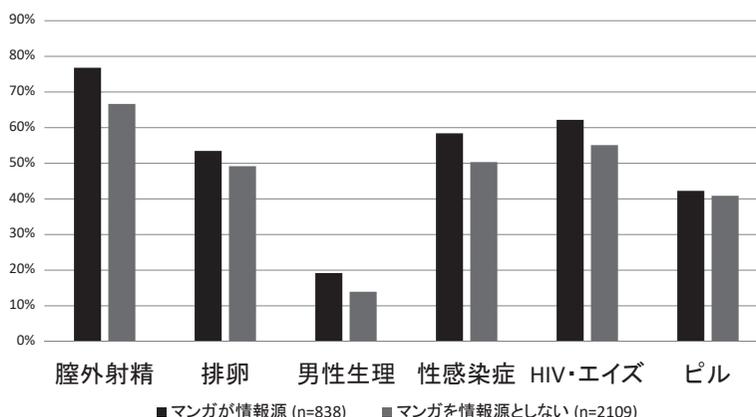


図10 性知識の正答率（高校・大学女子）

を問う項目としては、「膣外射精（外出し）は、確実な避妊の方法である」「排卵は、いつも月経中におこる」「精液がたまりすぎると、身体に悪い影響がある」「クラミジアや淋病などの性感染症を治療しないと、不妊症になる（赤ちゃんができなくなる）ことがある」「日本ではこの10年間、新たに HIV に感染する人とエイズ患者は減少し続けている」の6つの項目を尋ねている。田代の懸念に反して、6つの項目すべてで、マンガを情報源としている女子の正答率がそうではない女子の正答率を上回っていた。とりわけ正答率の差が大きいのが「膣外射精」（ $p < 0.001$, $V = 0.121$ ）と「男性生理（精液）」（ $p < 0.001$, $V = 0.118$ ）という、男性の身体に関する項目である¹⁴⁾。この調査全体を概観すると、性知識の正答率は、男子については女性の身体に関する項目の正答率が低く、女子については男性の身体に関する項目の正答率が低いという傾向がみられている。マンガを性の情報源にしている女子は、そうではない女子に比べて、この問題が少し緩和される傾向にあると言える。

調査からみえるもの

以上のようにみると、マンガを性の情報源にしている女子の特徴は次のように描くことができるだろう。性的関心が高く、性意識の寛容性や、セックスに対するポジティブなイメージ、そして性知識をもっているが、実際の性行動（キス、セックス）については経験率は高くない。

14) この項目について、高校男子については逆転現象がみられたことを付け加えておきたい。膣外射精については、マンガを情報源としている高校男子の正答率は55.9%であったのに対し、マンガを情報源としない男子は62.5%であった（ $p < 0.001$, $V = 0.153$ ）。マンガが高校男子の性知識をゆがめている可能性があることは大きな問題である。

SEAN 報告書や田代（2009）で示された研究と対比してみると、確かに、意識の側面から見ると、特に若い年齢においては性のダブルスタンダードを肯定するといったような点で影響を受けている可能性はある。しかし、行動や知識の側面からすると「問題」は生じていないのではないだろうか。

ここで、マンガを性の情報源とする大学生には性のダブルスタンダードを肯定する人が多くはなかったことについて考えてみたい。フィクションの中にはファンタジーだから許されることが描かれている場合がある。例えば、近年流行した言葉に「壁ドン」というマンガのシチュエーションがある。好きな人への思いが暴発的にあふれたことをマンガ的に示すために、壁に手をつき相手に詰め寄るさまを示している。しかし、これは現実の世界で他人からなされたならば、単に恐怖心をあおる行為でもありうる。この「壁ドン」のように、フィクションにはお約束として表現される事柄がとても多い。フィクションを読み解く力が高ければ、フィクションにはフィクションならではの表現があることを理解できる。この調査結果は、若ければ若いほど、そのような能力がまだ身につけていない人も多いことを示しているのではないか。必要とされるのは、マンガというフィクションにはフィクションならではの表現が含まれているということを伝えるメディア・リテラシー教育なのではないか。

なお、本節で分析したような、性に対するポジティブなイメージや、性知識の正答率の高さ、性（自慰や同性同士の性行為）に対する寛容性といった傾向は、インターネットを情報源としている女子についても析出することができた。マンガやインターネットを性の情報源としている女子の、このような傾向はどのように解釈することができるのだろうか。第一に、このような傾向をもつ女子だからこそ、マンガやインターネットの中の性的な情報の受け手になることができるという可能性である。第二が、マンガやインターネットなどの性的な情報が、女子のこのような傾向を強化しているという可能性である。いずれにしても、マンガやインターネットを性の情報源としているということは、自ら主体的に、性にポジティブなイメージをもって、性的なメディアにアクセスしていることを示している。若者が性的な情報源に接することのポジティブな側面を見のがしてはならない。

4. 「第8回青少年の性行動全国調査」に向けて

今年度（2017年度）は「第8回青少年の性全国調査」の調査年度にあたる。2011年以降のスマートフォンの普及を背景に、ここまで分析してきた第7回調査と比べて、性の情報

源の中でもインターネットが男女ともに中心化しているだろうことが予測される。また、ここ数年、「マンガアプリの群雄割拠」ともよばれる状態が到来し、インターネットで読めるマンガの数が格段に増えている。マンガサイトやアプリによっては、TLやBLを強く押し出すものもある。現在、性の情報源として、インターネットとマンガの両者が高まってきているのではないだろうか。本節では、「第8回調査」に向けて、性情報源をめぐる変化のありようをまとめておきたい。

「インターネットと性」については、様々な研究がなされているが、ここでは、性的主題についてインターネットを利用している人について調査した Daneback 他（2012）の研究をみてみよう。Daneback は、スウェーデン語で書かれているアダルトサイトや若者が集まるサイトで、18歳以上を対象に、性情報を求めてインターネットを利用している人はどれであるか、そしてその理由は何かを調査している。1913人の回答があり、そのうち1614人が性的目的でインターネットを利用していると答えていた。インターネットを利用する理由として、性的好奇心やオンラインの性的活動（ポルノグラフィ消費や恋人探し）のためばかりではなく、「身体についての知識を得たい」や「セックスのしかたについての知識を得たい」といった理由も多くを占めていた。オフラインでは他人と話せないが、匿名の空間が確保できるオンラインだからこそ、セクシュアリティに関する情報を探することができる人も多かった。Daneback は、半数以上の人々が性的問題に関する解決を求めてインターネットを利用していると答えていたことから、大人世代に向けた性教育の必要性を訴えている。

インターネットはポルノグラフィ消費などの性的な楽しみのためだけでなく、性に関する悩みを解決するためにも利用されているようだ。インターネット（特にスマートフォン）が普及する以前の女性向けポルノコミック誌はまさに女性たちのこのようなニーズに応えるものであった。歴史的にみると、女性向けポルノコミック誌というジャンルは、（1）女性たちのポルノグラフィに対する好みを明確化していくとともに、（2）女性たちの性的な悩みに応える場としても機能してきた。

まず、（1）女性たちがポルノグラフィに対する好みを明確化していった、その変化についてみてみたい。90年代初頭に女性向けポルノコミックであるレディコミ誌が創刊され始めたが、その頃にはだれも女性はどうのようなポルノグラフィを好むのかわかっていなかった。そのため、一番重視されたのが、読者の手紙（読者投稿）であった。レディコミの成立の初期に流行したスタイルの一つが、「読者の性体験の告白」をマンガ化した作品である。読者が送った「性体験の告白」は、実際に読者が体験したことなのか、単なる読者の

性的ファンタジーであったのかはわからない。読者投稿を活用することによって、レディコミは読者を雑誌に巻き込んでいったのである。そして、読者の手紙は、何よりも読者のニーズを知ることができる唯一の重要なメディアであった。最初の女性向けポルノ誌の一つである『コミック Amour』（サン出版、1990年創刊）を立ち上げた編集者、水野正文氏は、創刊当初は既存の男性向けのポルノ誌に比べて繊細につくらなければと思い、匙加減を慎重にやっていたが、「読者の反応に後押しされて、どんどんHになっていった」と語っている（2004年9月筆者によるインタビュー）。レディコミというジャンルは、読者の反応を頼りに手探りで形づくられていったのである。

読者からの要望は、レディコミ成立時期には「もっとセクシーに」「エロティックに」といった漠然としたものであった（諸橋 1993：238）。2000年代に入ると、レディコミだけでなく、男性同士の性愛に特化したBL誌や、より若い年代向けの絵柄で書かれたTL誌など、さまざまなジャンルが登場・定着する。守（2010）では2004年のレディコミ誌とBL誌への読者投稿を分析しているが、その時期の読者投稿は、自分の好みのシチュエーションを細部にわたって明確に指摘するものに変化していた。

現在、女性向けポルノコミックは、雑誌からインターネット上のサイトに掲載の場を中心に移行しつつある。これら、ネット上のエロティックなマンガ作品は、読者の好みの明確化という変化の延長線上に位置づけることができる。ネット上のポルノグラフィは、それぞれのサイトで、自分の好みのものが選べるように、キーワード検索ができるようになっている。TL・レディコミやBLを集めたサイトにおいてもスタイルは同様である。女性たちは自らの好みにあった性的な表現を含むマンガ作品を、たやすく検索し読むことができるようになったのである。

つぎに、（2）女性向けポルノコミック誌が女性たちの性的な悩みに応える場としても機能してきたという点について考えてみたい。90年代のレディコミ誌において、読者投稿記事は大変大きな比重を占めていた。1997年12月号のレディコミ誌についていえば、一誌当たり平均して10ページ以上の読者投稿記事が掲載されていた（読者投稿を原作としたマンガ作品を除く）。読者の性体験を中心に、性に関する悩みから、単なる性をめぐるつぶやきのようなものまでが読者投稿記事として掲載された。この時期、レディコミは女性読者が自らのセクシュアリティを語る「場」になった。匿名の空間が確保されることによって、読者は自らの体験や気持ちを語り、他の女性たちの性的欲望を知ることが可能になったのである。

性の二重規準がいまだ残存している社会では、女性にとって、他の女性たちの主体的な

性的欲望の存在を知ることができることは重要な意味をもつ。パット・カリフィアは次のように述べている。

「現在のような制約の多い状況の下で作られたものでも、それ（著者注：ポルノグラフィ）にはやはり価値がある。それはわたしたちに、悦楽と反抗のメッセージを伝えてくれる。それはこう言うのだ——性欲は悪いものではない。肉体は忌まわしいものではない。肉体的な喜びは楽しいものであって、隠したり否定したりしなければならないものではない。女性に性的欲望がないというのは嘘だ。あなたが夢見ているのと同じことを考えていたり、実際にしたりしている人が他にもいるのだ。」

（カリフィア1998：156）

まさに女性向けポルノコミックは、存在そのものだけでなく、その内容が、カリフィアが述べるように、女性にも性的欲望があることを女性読者に伝えるメディアであった。

しかし、現在にいたっては、レディコミ・TL・BLのどの雑誌をみても、読者投稿記事は2ページ程度の分量に収まっている。ただし、この変化はページが大幅に減ったというよりも、一般的なマンガ雑誌の読者投稿ページと同じ状態になったというほうが正確である。現在では、インターネット上にはさまざまな性情報があふれ、性に関する悩みを相談できるさまざまなサイトも存在している。1990年代レディコミがもった「性の悩みに応える場」という機能はすっかりインターネットにとってかわられたのである。

以上のようにみると、かつて女性向けポルノコミック誌が担っていた役割は、その2つともがインターネットに移行しつつある。そして、インターネットは、雑誌に比べても、アクセスしやすいメディアでもある。そのような変化の中で、若者女性にはいかなる変化がおきているのだろうか。この点を「第8回調査」の課題としたい。

*謝辞：本稿にいたるまで、研究会や院ゼミ、学会などのさまざまな場で、多くの人からコメントをいただいた。全員のお名前をあげることはできないが、Takeyama Akiko氏、長光大志氏、堀あきこ氏には特に重要なコメントをいただいた。記して感謝したい。

引用文献

- 浅井春夫・他編2009『性の貧困と希望としての性教育』十月舎
- 金田淳子2007「やおい論、明日のためにその2。」『ユリイカ 12月臨時増刊号 総特集BLスタディーズ』(Vol.39-16) 青土社
- カリフィア、バット1998『パブリック・セックス——挑発するラディカルな性』(東玲子訳) 青土社
- 北田暁大2017「動物たちの楽園と妄想の共同体；オタク文化受容様式とジェンダー」北田暁大+解体研編『社会にとって趣味とは何か；文化社会学の方法規準』河出書房新社
- 白石智子2015「大学生は発達過程においてどのようなジャンルのマンガと接触してきたのか？」『マンガ研究』(21号) 日本マンガ学会
- 田代美江子2009「〈恋愛〉というカタチの「貧困な性」～〈恋愛〉情報のメディア・リテラシー」浅井春夫・他編2009『性の貧困と希望としての性教育』十月舎
- 團康晃2017「マンガ読書経験とジェンダー；二つの調査の分析から」北田暁大+解体研編『社会にとって趣味とは何か；文化社会学の方法規準』河出書房新社
- 遠矢家永子・他(NPO法人SEAN)編2008『マンガ・雑誌の『性』情報と子どもたち』2007年度大阪府ジュニア活動事業報告書(特定非営利活動法人シーン発行)
- 永山薫2006『エロマンガ・スタディーズ』イースト・プレス
- 堀あきこ2010「ヤオイはゲイ差別か？——マンガ表現と他者化」好井裕明・編『差別と排除の〔いま〕第6巻セクシュアリティの多様性と排除』明石書店
- 堀あきこ2015「BL図書排除事件とBL有害図書指定からみる性規範の非対称性——女性の快楽に着目して」『マンガ研究』(21号) 日本マンガ学会
- 長岡義幸2010『マンガはなぜ規制されるのか；「有害」をめぐる半世紀の攻防』平凡社新書
- 溝口彰子2000「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン」『クィア・ジャパン』(Vol.2) 勁草書房
- 溝口彰子2015『BL進化論：ボーイズラブが社会を動かす』太田出版
- 村瀬ひろみ1996「日本のポルノ状況と「性教育」——マッキノンに依って」『女性学年報』(第17号) 日本女性学研究会
- 守如子2010『女はポルノを読む——女性の性欲とフェミニズム』青弓社ライブラリー
- 諸橋泰樹1993『雑誌文化の中の女性学』明石書店
- 日本性教育協会編2013『「若者の性」白書——第7回 青少年の性行動全国調査報告』小学館
- Daneback, Kristian et al. 2012 The Internet as a source of information about sexuality, SEX EDUCATION – SEXUALITY SOCIETY AND LEARNING, 12-5, 583-598.
- Hald, Gert Martin 2006 Gender differences in pornography consumption among young heterosexual Danish adults, ARCHIVES OF SEXUAL BEHAVIOR, 35-5, 577-585.
- Mattebo, Magdalena et al. 2014 Pornography and Sexual Experiences Among High School Students in Sweden, JOURNAL OF DEVELOPMENTAL AND BEHAVIORAL PEDIATRICS, 35-3, 179-188.

—2017.9.27受稿—